

詩的イメージ構造の特性

環境の〈詩性〉に関する研究 その3

CHARACTERISTIC OF POETIC IMAGE STRUCTURE

Study on poetic-imagery of environment Part 3

高木清江*, 松本直司**, 瀬尾文彰***

Kiyoe TAKAGI, Naoji MATSUMOTO and Fumiaki SEO

In this paper, the concept of the image structure was made clearer, and the research on the poetic-image structure was executed. The research technique and the procedure were also established through investigating. In addition, the validity of the idea concerning the characteristic of poetic-image structure was verified. As a result, eight types of the poetic image structure were found. The type of the poetic image structure was named 'poetry pattern of the image'. The hypothesis concerning a poetic image structure was verified though not quite satisfactorily.

keywords : poetic-imagery, image structure, poetic-imagery structure

〈詩性〉, イメージ構造, 詩的イメージ構造

1. はじめに

前稿¹⁾において, イメージの意識の動きは, 想起と展開と呼ばれる一連の現象からなる網目状の構造をなしていることを示し, その構造をイメージ構造と呼んだ。そして, 日常的に思い浮かべる表層意識のイメージの流れを日常的なイメージ構造と呼び, 詩的なイメージは日常的なイメージ構造からずれた構造をなすものであって, 〈詩的イメージ〉という特殊なイメージが存在するのではないであろうことを述べた。

しかし, それは未だ考察の段階であり, 一つの仮説として示されたとはいえ, 詩的イメージ構造のあり方, あるいはその原理には不明な点が多い。これを明らかにすることが詩的環境の計画手法を探る上で必須である。本研究はこのことを目的とするものだが, この狙いに沿った適切な研究手法は既存のものとしては存在しないため, 研究手法自体の開発を研究内容に含めながら進めざるを得ないことも既に示した。

本論では, イメージ構造の概念をさらに掘り下げて理解し, 詩的イメージ構造調査を行う。調査を行いながら, 研究手法及び手順を確立すると共に, 詩的なイメージ構造の特性に関する(前稿¹⁾に示した)考え方の妥当性を検証し, 今後の研究の方向を明確にすることを目的とする。

2. イメージ構造

2-1 イメージコード

一般に日常生活は習慣や慣習などを含む制度に基づくところが大きい。それらは秩序ある生活を送るには必要不可欠なものであり, いうまでもなく, 犯罪はそれに対する違犯である。しかし, 制度のなかには, 秩序ある生活を保障する反面, その拘束が時には窮屈に感じられる側面が存在することも否定できない。そのため, 制度を破る, 秩序から外れるということに, ある種のアコガレや魅力を感じることに人にはある。

言語は日常生活を送るための一つの道具であり, コミュニケーションを図るのに必要なものである。もちろんそこには周到な制度が存在する。その制度のゆえに日常使用している言葉は苦もなく互いに理解し合えるのである。しかし, 詩の言葉は我々が日常使用している言語を用いてはいるが, 日常の言葉のように容易には理解できない。理解は出来ないが, 何かを感じるのである。

理解しがたい(言葉にあらわしがたい)が何かを感じるという詩の特異な性質は, 言語の組み合わせ方の工夫や変形などによるものである。言語の制度的な枠組みにならされている我々には, そのような新しい言葉の用い方が新鮮で魅力的にみえ, 詩的イメージとして感じ取られる場合があるのだと考えられる。^{※1)}

* 名古屋工業大学大学院社会開発工学専攻
研究生・博士(工学)

** 名古屋工業大学工学部社会開発工学科 教授・工博

*** 大同工業大学工学部建設工学科 教授・工博

Research Student, Dept. of Architecture, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Construction, Faculty of Engineering, Daido Institute of Technology, Dr. Eng.

このような関係は、環境のイメージにおいても同様である。環境のイメージにおける制度をイメージコードと呼ぶことにする。イメージコードは、文化や民族や特定の集団内での共通の感じ方やイメージ生起の仕方である。そして、詩的イメージはイメージコードへの違反あるいは逸脱の結果であると考えられる。

環境のイメージコードを具体的にみる。例えば、「公園」を想起させるものとして、ベンチ、ヨーロッパ風の街灯、噴水、花壇、生い茂る木々、あるいは遊歩道、こうしたものが思い浮かぶ。これらは、個々でも「公園」を想起させるし、複数になれば、例えば木々とベンチが組み合わされば、一段と「公園」を想起させ易い。「公園」からさらにイメージの流れは「ゆとり」「落ち着き」などの印象へと展開し易い。こうした例に見られる想起・展開の過程は、いずれもごく普通に起こることであり、大方の人にとって納得し易い。すなわち、暗黙の約束のようなものと考えられる訳であり、イメージコードの例である。

これらのイメージコードは我々の頭の中で整理されていて、イメージのファイルに納められていると言うことができる。上記の例では、「公園」をイメージさせるいろいろのものは『公園コード』と銘打たれたファイルに整理されているかもしれないし、『落ち着き』などの印象の項目に整理されているかもしれない。ファイルを開いて一つでも二つでも要素を取り出せば、所定のイメージが想起されるという訳である。

このような整理を人々が共通に行うことよって、我々は様々な環境のイメージを間違いなく把握し、他の人と感じ方を共有できるのだと考えられる。

2-2 イメージ構造

イメージの想起・展開過程において、イメージが何を原因として想起され、どのように展開したかを明確に把握することは重要であり、そのためにはその過程を記述できなければならない。一定の物的要因からイメージが想起され、さらにそれが展開し最後の印象にまで至る因果連鎖的な過程を整理・記述したものを、本研究ではイメージ構造と呼ぶ。

イメージ構造には、ベンチや街灯から「公園」が想起されるといった連鎖の短いものも存在するし、「公園」から「憩いの場」に展開し、さらに「やすらぎ」「安心」へと展開する連鎖の比較的に長いものも存在する。さらに、幾つもの想起・展開が絡み合った大きなものも存在する。都市のイメージは通常そのようなものである。通り、公園、建物などはそれぞれにイメージコードを形成する。それら幾つものイメージが合わさって街のイメージ構造を成している。さらに、ある街のイメージ構造と別の街のイメージ構造が組合わされてさらに大きなイメージ構造を形づくる場合もある。東京のイメージは新宿、池袋、恵比寿、お茶の水などなど多くの街のイメージが合わさっている。

このような複雑なイメージ形成の実態は、漫然と感じることは出来ても、そのプロセスや仕組みを知ろうとすれば容易ではない。イメージを因果連鎖的に明確に記述してこそ見えてくる。すなわち、イメージ構造の記述が必要である。

我々が日常感じているイメージはイメージコードに基づいており、日常的なイメージ構造として理解できる。日常的なイメージ構造は制度の範囲で成り立っているのです、一見複雑でも関係や流れが比較

的理解し易い。それに対して、詩的なイメージは制度に納まらないイメージであり、それがどのように納まらないかも、イメージ構造から理解できる。詩的なイメージが日常的なイメージと異なることは分かっても、それがどのように異なっているかの詳細は、イメージ構造を明確に記述しなければ見えてこない。そのため、イメージ構造という考えは、本研究独自のものであるが、日常的なイメージと詩的なイメージとを問わず、イメージというものの理解に有効である。

2-3 詩的なイメージ構造

詩的なイメージ過程を因果連鎖的に記述したものが詩的なイメージ構造である。詩的なイメージ構造には、日常的なイメージ構造にはない意外さのようなものが示されていると想定される。図書館が図書館らしくなかったり、病院が病院らしくない場合、我々は違和感や意外さを感じる。これを構造的に記述すれば、図書館が図書館らしく、病院が病院らしくある、当たり前前日常的なイメージの流れと、異質なイメージとして感じられてしまう別の流れが共存する、一種の矛盾の状態が示されるはずである。この例が詩的かどうかはケースに依るところだが、ともあれ、詩的なイメージというのは、日常的なイメージ構造の正常さに対して、構造の乱れや歪みとして示されるものであると考えられる。

前稿¹⁾において、詩的なイメージ構造に関する準備的な検討を行うために深層心理学的なインタビュー方式を用いケーススタディを行った。その際に、「わくわくする」「はっとする」「不思議」「面白い」などの詩的イメージを指示すると考えられる言葉を抽出し、日常的なイメージ構造の変形の例を<歪曲><対比><対立><矛盾><複合>のような名称で示した。ケーススタディは被験者一人で行ったために正確なことは言えないが、これらは、日常的なイメージ構造を変形させ、詩的イメージ構造を形成するコードの逸脱形式の一部であると考えられた。

本論文ではこのような詩的イメージ構造におけるコードの逸脱形式をさらに明確化するために調査をおこなう。

3. 詩的なイメージ構造

3-1 詩的なイメージ構造調査

(1) 調査方法

前稿¹⁾において、言葉にしにくい詩的イメージを導き出し把握することは、臨床的な深層心理学者が患者に対応するような対処の仕方をとることにより可能となるであろうことを述べた。

被験者の心の中は被験者にしか分からないものである。ある人に感じられることが、他の人には感じられない場合もある。これを実験者が感じ取るには、被験者の心になって、心の奥底にある感情に触れることが重要である。これは広い意味での解釈学的方法である²⁾。インタビュー結果を分析するさいにも解釈学的方法を用いる必要がある。解釈学の方法は自然科学的な客観性は問にくいだが、本来主観的なものである心を扱う方法としての合理性は期待できる³⁾。そのような方法をとる限り、調査の仕方は個性の強いものとならざるを得ないが、いくら個性が強いとはいえ、調査の手順を定めることは必要である。そこで、被験者の深層意識をより明確に引き出すやり方を模索しながらインタビュー調査を行い、その手順を明らかにしていった。結果として得られた調査方法の手順を図

1に示す^(注4)。

(2) 調査状況

調査手順を模索しながら(1)に述べたインタビュー方法に基づき調査を行った。調査状況を以下に示す。

期間は1999年1月～8月

調査人数は25名

調査対象者は20代の男女で、自分の好きな場所や心に残っている場所の印象を言葉として表現する能力のあるもの。^(注5)

対象地は、対象者の好きな場所や心に残っている場所。

インタビューはテープに記録し、あとでテープを起こして資料とした。全インタビューリストを注6に示す。

(3) 調査結果

以下に調査結果のうち3例を示す。図2～4参照。

① 注6のリストにおけるインタビュー3。被験者は20代の女性。場所は実家の納戸。インタビューの全文は注7。

被験者は幼い頃納戸が気に入りの場所だった。現在は家が建て変わりこの納戸はない。納戸は仏間や縁側に近く、3、4畳の広さで薄暗い。しかられた時や一人になりたいときの逃げ場だったと述べている。当時の家の思い出の中で一番印象に残っている場所である。暗くて、狭くて、静かで、怖い感じもあった、がそれが逆に探検しているような冒険心をそそっている。次の表現からその思いが伝わってくる。

「入る前は何となく怖い感じ。最初は入れなかった場所、怖くて、暗いし、入り口が見えない、狭い感じがして怖かった。」

「中に入っちゃうと結構長くいた。」

「長いトンネルっていうか、でも電気がないんだよね。先に何があるんだろう、・・・わくわくした感じ。」

「何があるんだろうってちょっと楽しんで。」

「探検している気持ちが楽しかったかもしれない、次に何があるんだろう、わくわくした感じ。」

被験者のお気に入りには布団でそのことについて次のように述べている。

「布団の近くがお気に入りだった。」

「柔らかいでしょ。」

「なんか包んでくれそうな感じ。」

護られている感じ、お母さんの膝のような安心感、子供にとってのそのような思いがあったものと察せられる。

布団のやさしさと納戸の狭くて薄暗い状況が相乗的な効果となって逃げ場という印象につながっていたと解釈できる。

さらに、逃げ場のある種の落ち着きと、冒険心をそそる感じの対比的な一体化によって、わくわくした、楽しい、という子供心の充実を醸し出していたと解釈される。

② 注6のリストにおけるインタビュー4。被験者は20代の女性。場所は永平寺。インタビューの全文は注7。

参道を進み、『境内通り』に入るに従って、それまでは普通のお寺と変わらないと思っていたものが突然感じが変わる。

「修行する人がいるから宿舎とかいっぱい建物が並んで、L字型とまっすぐな通路。そこを歩いていくと急に雰囲気が変わる、普通のお寺の道みたいな感じから急に。」

そしてその印象は心に深く突き刺さるような強い衝撃をもたらし、

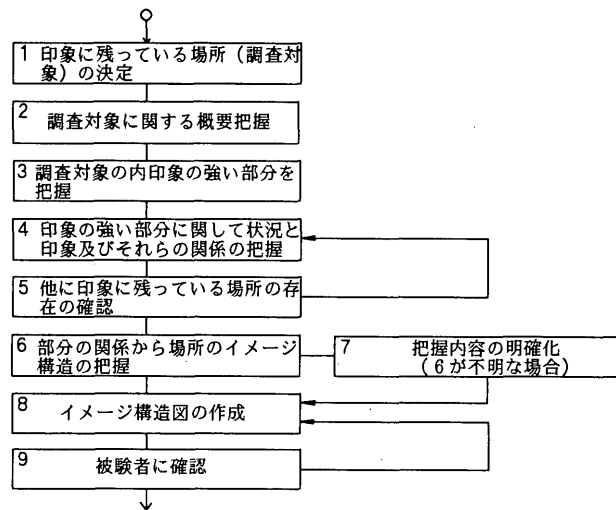


図1 調査手順

我を忘れるような体験をする。

「後ろを振り返っても、その道が続いているような新鮮な感じ。」

「前向いて歩いてるからそのイメージが後ろにも続いて今まで来た道が見えない感じ。」

「自分が透明じゃないけど、とにかく透明な感じ。」

「風は黄緑っていうのは実際の色じゃなくて、こう・・・見えるような。」

自分でも何が何だか分からない状態に陥っている様子をうかがえる。

「その中では『無』、自分が小さいと思ったりすることもあるけど、そこは『はあ』って感じだけ。」

「何も考えない・・・考えられないんじゃないけど、ただいって感じ。」

「新鮮、心にどーんとくる。」

それらのわき上がる様々な想いが相乗的にはたらき次の言葉となっている。

「『はあ』って感じ。」

③ 注6のリストにおけるインタビュー6。被験者は20代の女性。場所は名古屋市栄のナディアパーク。インタビューの全文は注7。

この場所は名古屋にできた新しい複合商業ビルの、その真ん中にある大きな吹き抜けの空間である。被験者は何度かこの場所を訪れている。しかし、当初は他のビルと大差がないと感じていたようである。それがある日の夕方これまでのイメージを一変するような出来事が起こった。そのときの気持ちを

「お店に入って、適当にお店に入って明るいところにいて、ふっと外に出たら、真ん中がすごく暗くって、真ん中って階段があったり、水があるところで、ガクッと暗くって外の暗さと同じぐらい暗くって、あれっ、外かと一瞬思ったけど、それがすごく良かった。」

「中にいるはずなのに急に外なんだよ。」

「ちょっと衝撃じゃんそれは。」

と述べている。この言葉から、明るい『お店』と暗い『中央部分』の明暗の落差から、屋内のはずが屋外だと感じた時の意外さへの感嘆の気持ちを捉えることが出来る。

この事例では全体を通して『お店』と『中央部分』の異なるイメ

ージが述べられており、『お店』と『中央部分』のイメージがぶつかり合いながら、これまで感じられなかったイメージが感じ取られていると解釈される記述が多い。

中央部分については以下のような印象が述べられている。

「夜行性みたいな感じ、怪しい感じ。」

「本当に外かなくて思った、みたいじゃなくって。」

「なんか空みたいって言うか、そんで、その辺下がゴツゴツしているじゃん、石っぽいじゃん。」(外と同じような要素と風景を持っている)

さらに、『お店』と『中央部分』の異質なイメージ同士のぶつかり合う面白さと『中央部分』を屋内なのに屋外だと感じてしまう錯覚の衝撃が、次のような言葉として表現されている。

「軽い錯覚。」

「『あれっ』て思った。」

「『あっ』びっくりって感じ。」

(4) 詩的なイメージ構造の記述

どのインタビューも繰り返しが多く、話があちこちとんで前後しており、心象風景の中を彷徨いながら、ミーニングを手探りする様子がうかがえる。ここから被験者の心の動きを様々な形で読み解くこと(=分析)が必要である。

しかし、道筋の必ずしも明確でないインタビューの結果を見ただけではなかなか分析もまとまらない。被験者が述べようとしていることの意図を明確にするためには、イメージ構造のかたちに、インタビュー結果を記述し直すことが望ましい。しかしこれは機械的に進められる作業ではない。

イメージ構造図作成に関しても、インタビュー調査と同様に、どのようにすれば被験者の意図を明確に表すことができるか、イメージの流れをスムーズに見ることができるか、イメージ構造の詩的特性を明確に図中に表すことができるかなど、多々問題があり、イメージ構造の表記手法に関する原則を確立する必要がある。そこでイ

メージ構造図作成の手法確立についても、試行錯誤を行い、その結果、イメージ構造の記述にあたっての一般的な検討手順を次のように定めた。丸印のついたものは各ステップの中の順序である。

step 1. 詩的体験の単位を1つの物語の単位を捉えるような考え方で把握する。これは、被験者が述べた言葉へのインタビューの共感を通して、解釈学的に可能となる^{※9)}。

①詩的イメージの言葉(感嘆語など)が大きな場所のどの箇所に関して述べられたものかを見つける。

②その箇所について述べられている記述(インタビュー記録のあちこちに分散している)を見つける。

③そこから、場所の部分、そこにあるもの、その状況、イメージなどを抜き出す。

④その部分に関するイメージの流れとして、場所、場所の要素、状況^{※9)}、イメージ、詩的イメージの順に並べ記述する。こうして詩的体験の単位を把握する。

step 2. ②～④の作業を①で捉えたすべての詩的イメージの言葉の箇所について行う。単位相互の関わりがある場合はそれを考慮しながら関連づけて記述する。

step 3. 全体の流れをまとめる。

step 4. 詩的イメージが導かれていると思われる部分には、イメージの詩化パターン(後述)を記入する。

step 5. 完成時点で被験者に提示し、イメージの過程が妥当であるかどうかを判断する。妥当でない場合は、step 1～④に戻り(場合によってはstep 1の最初に戻り)再検討する。

(5) 詩的イメージ構造図

上記のような詩的イメージ構造記述手順に従って前記調査結果について作成したイメージ構造図の一部を図2～図4に示す。

3-2 詩的なイメージ構造の特性

イメージ構造図の作成を通じて、イメージとイメージがぶつかり合っている場合やイメージとイメージが合わせられてさらにイメー

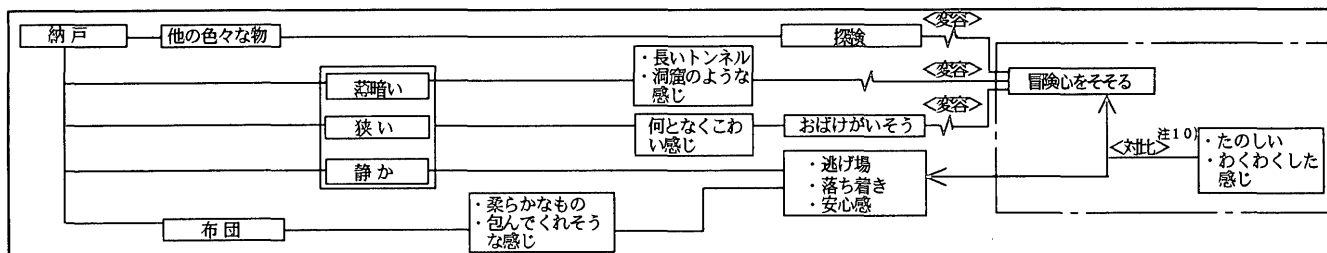


図2 インタビュー事例図(インタビュー3)

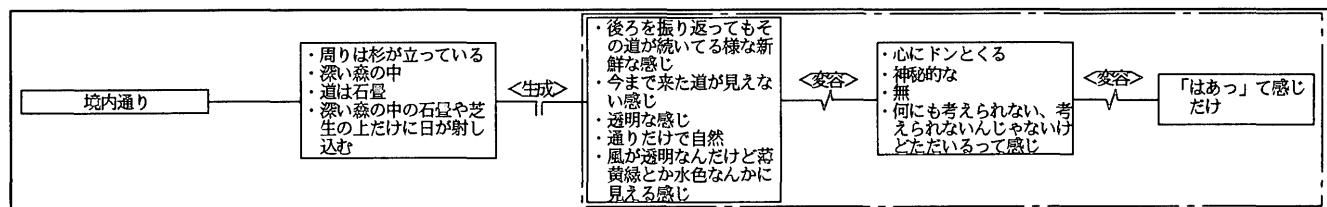


図3 インタビュー事例図(インタビュー4)

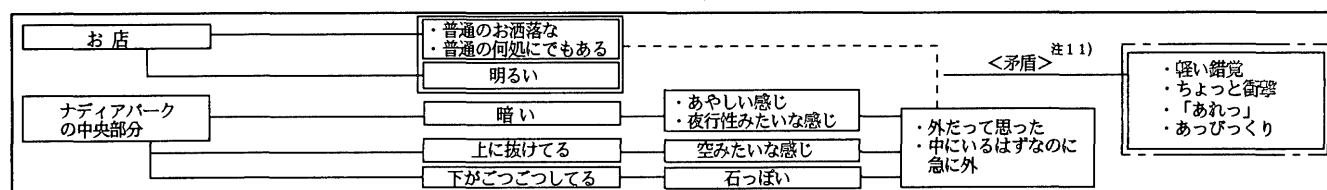


図4 インタビュー事例図(インタビュー6)

— は詩的イメージ

ジが導かれている場合などの詩的イメージの生起の仕組みを見て取ることができた。それは、前稿¹⁾において述べたイメージの生起の仕組みの仮説と一致するものであった。さらに新たに、イメージが中断し飛躍するといったケースも多々認められた（後述の〈生成〉×〈変容〉に当たる）。

詩的イメージ構造調査において、「はっ」「驚き」などという言葉は詩的イメージの表現であると解釈される場合が多い。通常のイメージは「・・・みたい」（例えば「地下街」「川」「参道」「お土産屋」・・・）あるいは「・・・の感じ」（例えば「明るい」「暗い」「威厳ある」・・・）の形式で表現される。このようなイメージが連想の連鎖となって連なるイメージ構造は、いくら長く連なっても日常的イメージ構造である。イメージ展開の過程で、そうした形式では表現できない、言葉に窮するといった体験にぶつかる場合があり、その時、いわば逃げとして、「はっ」「驚き」といった言葉が発せられるのだと思われる。

それは、イメージの特異な関係から引き起こされる。日常的イメージの組み合わせが特異な関係をとることによって、あるいはイメージの現象が特異な事態におちいることによって詩的イメージが導かれる。詩的イメージは、複数のイメージの通常とは異なる関係から生起する異常な（図4）、あるいはイメージがつきつめられた濃密な（図2、図3）イメージ体験であり、その体験を表現するのが「はっ」「驚き」「わくわく」「おもしろい」などの言葉だと考えられる。我々が日常当たり前のように感じている認識がぐらつく時、そのとまどいが詩的体験となる。本調査からはそのような事例がいくつも得られた。

詩的イメージはイメージ構造図の流れの上に表れる通常とは異なる関係として記述されるということが、詩的イメージ構造調査を通じて、事例が少ないゆえに限定的であるとはいえ、実証されたと考えられる。また、「あっ」「はっ」などという言葉からさらに先のイメージを導くことは出来なかった。「あっ」「はっ」などという言葉は、「・・・のよう」「・・・みたい」と表現できない時に、すなわち我々のイメージファイルにないイメージにつき当たったときに発せられる言葉であり、その新しい発見による戦慄が、ミンコフスキーが述べている『反響』¹²⁾となって、体全体をふるわせる体験になるのだと考えられる。

以上を整理して、詩的イメージ構造の特性に関しては以下のように示せる。

- ① 物的なもののから印象までの流れを持つイメージ構造として記述される。
- ② ただし、イメージ構造は終始スムーズな流れを形成するのではなく、分断され、分断された構造の部分相互が特殊な関係によってあらためて結合される。¹³⁾
- ③ 詩的イメージという特異なイメージは存在しない。イメージ構造の特殊な関係から生起する、言葉になりがたい心の現象を詩的イメージと呼ぶのである。
- ④ 詩的イメージは「言葉にならない」という性格のゆえ、最終的には「あれ」「はっ」「驚き」「不思議」などといったある種の感嘆詞によって表現されるのが一般的である。
- ⑤ 詩的イメージを生起させる特殊な関係にはいくつかのタイプがある。これについては4に詳述する。

4. イメージの詩化パターン

調査結果から詩的イメージを形成する8つのイメージ構造特性が得られた。これらを『イメージの詩化パターン』と呼ぶこととする。以下にそれぞれについての説明を行う。表1はイメージの詩化パターンの定義と図表現を示したものである。注14に25事例について表れたイメージの詩化パターンの種別を示す。

4-1 生成

ある状況に他の状況やイメージの関与なく、その状況から直接に詩的イメージが導かれるものである。

例えば、「深い森の中」「道は石畳」「深い森の中の石畳や芝生の上だけに日が射し込む」という状況から、「参道のように」というような一般的なイメージへ進む流れは突然中断され、「後ろを振り返っても、その道が続いているような新鮮な感じ」「前向いて歩いてるからそのイメージが後ろにも続いて今まで来た道が見えない感じ」「透明な感じ」などという詩的イメージへと飛躍している場合（インタビュー4）がこれに当たる。

イメージの流れとしては、〈対比〉や〈複合〉などのようにイメージが交錯することはない。「3-2 詩的イメージ構造の特性」でイメージの特異な関係から詩的イメージが生じると述べている。〈生成〉における特異な関係はイメージの中断である。日常性が中断され、コードから切り離され、詩的イメージへと吸い込まれていく。〈変容〉との違いは、詩的イメージの派生するもだが、状況であるか、イメージであるかという違いである。〈生成〉では状況、〈変容〉ではイメージである。

4-2 変容

あるイメージが、他からの関与なく詩的イメージへと深まる場合である。

「薄暗く」「狭い」「静かな」場所を「長いトンネルのよう」「洞窟のような感じ」のイメージと感じた。そこから「冒険心をそそる」という、言葉では説明しにくいがなにか胸おどるイメージ体験の言葉が導かれている場合はその例である（インタビュー3）。

また、寺の境内を進むにつれて、「今まで来た道が見えない感じ」「透明な感じ」のように表現されるイメージの中断と飛躍があり、そこからさらに詩的イメージが「心にドンと来る」「無」などのイメージへと高まり、さらに「『はあ』で感じだけ」というクライマックスに至るという例もそれに当たる（インタビュー4）。参道を進むにつれてだんだん気持ちが高揚してゆく例である。

一般のイメージが他からの関与なく詩的イメージへと導かれる場合と同時に、詩的イメージが他からの関与なくさらに強い詩的イメージに深まるという場合もある。後者では、イメージの流れは、詩的イメージの言い換えの言葉によって形成されている。

4-3 収束

複数の類似するイメージが束ねられて詩的イメージが導かれる場合。

例えば、いつもひどい川であると思っていた川が、ある時、夕日の作用でこれまでに見たことのないほど美しく見えたため「びっくりした」「今のは何だったんだ」と感じ、一方、暗いところを通過して川の明るいところに出たことに対して、黒から赤の色の変化に「びっくりした」「今のは何だったんだ」と感じ、これらの同類のイメージが束ねられて、「訳がわからん」「『はあ』って」「不思議

議」という一種のパニック状態に至るケース（インタビュー2）はこれに当たる。

このように同類のイメージが束ねられて詩的イメージが導かれるものである。〈複合〉〈強調〉〈転換〉との違いは同類のイメージが束ねられることにある。同類のイメージでない場合は〈複合〉となる場合が多い。

4-4 対比

異なるイメージAとイメージBがぶつかり合って、詩的イメージが導かれる場合。^{註15)}

次のような例がある。納戸の中は「暗く」て、「狭く」て、「静か」で、「怖い感じ」。しかし、それが逆に探検しているような「冒険心をそそる」ものでもあった。一方、納戸の中にあった布団は「柔らかなもの」「包んでくれそうな感じ」から「逃げ場」「落ち着き」「安心感」のイメージである。その2つの全く異なるイメージの一体化によって「わくわくした」「楽しい」という詩的体験の言葉が発せられている場合（インタビュー3）。

〈対比〉の特徴は異質なイメージの対比から詩的イメージが導かれることである。異なる対象から発したイメージの間の対比である場合もあるし、対比として感じ取られるイメージが同一の対象から発している場合もあり得る。

4-5 矛盾

同じ場所において相反するイメージAとイメージBが同時に存在し、矛盾の感覚を伴う詩的イメージが導かれる場合。すなわち、一つの対象から生じる2つのイメージが矛盾した性格のものであるような場合や同一空間上の異なる対象からの2つのイメージ間で相反するイメージが反発し合って詩的イメージを導く場合である。

例えば、複合商業施設の中のアトリウム。建物の中なので「屋内にいる」と思っている。しかし、アトリウムに出た瞬間、とっさに「外だっ」と感じてしまい、その2つの矛盾するイメージがぶつかり合って「軽い衝撃」「ちょっと衝撃」「あれっ」「あっぴびっくり」というイメージが導かれている場合（インタビュー6）。

〈矛盾〉は、同時に異なったイメージAとイメージBが存在し、そのためにその場所のイメージに矛盾を感じるものである。〈対比〉は矛盾はしないが異質なイメージのぶつかり合いや、イメージは矛盾しても時間のずれがあって矛盾が顕在化しないような場合である。

4-6 複合

複数のイメージが複合することにより、詩的イメージが導かれる場合。

例えば、新宿の駅前の喫茶店。喫茶店は電車が走っている上に位置し、電車が走っているのを見て「橋みたいに浮いている感じ」「電車が下を流れている川みたい」というイメージ。それと、喫茶店の床が木で出来ており、まわりはざわざわした場所であることから導かれた「オアシス」というイメージ。それらが複合されて、下のざわざわした空間とは別の世界である「街の上に浮いている場所」という詩的イメージが導かれている場合（インタビュー13）。

この場合、複合されるイメージは詩的イメージである場合もあるし、一般のイメージの場合もある。ここで示したのは2つのイメージが結びついて詩的イメージを導き出す例であるが、多数のイメージが複合する場合もあり、いくつものイメージの流れが交錯することになる。

4-7 強調

イメージAにイメージBが関与することによってイメージAが強調され詩的イメージへと深められる場合。

例えば、子供のためにつくられた遊び場に行って館内にあるものがすべて子供サイズであるのに「おすごい」と感激する。さらに、館内で時間を過ごしているうち次第に子供心にかえって「大人はだんだん服を脱いでいく感じ」というイメージが導かれ、そのイメージが「おすごい」のイメージの関与によって強調され、「楽しい、わくわく、すっきり、爽快」「裸になった」という子供心の楽しさを強調する詩的イメージとなっている例（インタビュー7）。

〈強調〉の特徴はあるイメージが強調されて詩的イメージに深められることにある。あるイメージが強調されるため、類似のイメージがすでに存在することが条件である。〈転換〉との違いはそこである。

4-8 転換

イメージAにイメージBが関与してイメージAが詩的イメージCに変化する場合。

例えば、「ショップ内部」は「落ち着く」「暗めな感じ」「自然なイメージ」「静かって感じ」などというイメージがあることに對して、「外」は「ざわざわ」「わいわい」「複雑」「明るい」というイメージであるとき、ショップ内のイメージにざわざわした外のイメージが関与し、ショップ内が特別な空間のように感じられる変化を生じて「独自の空間」「綺麗な暗さ」という詩的イメージへの転換が起る例（インタビュー12）はそれに当たる。

〈対比〉との区別は、〈対比〉ではイメージAとイメージBの比較から全く異なるイメージが出てくるのに対し、〈転換〉はイメージAが変化してその延長上に詩的イメージが導き出される点にある。

表1 『イメージの詩化パターン』の定義及び構造模式図

名称	模式図	定義
生成		状況1が他からの関与なくイメージCを生成せしめる
変容		イメージAが他からの関与なくイメージCへと深まる AがC'の場合もある
収束		複数のイメージAが束ねられイメージCが導かれる AがC'の場合もある
対比		異なるイメージAとイメージBがぶつかり合って新しいイメージCが導かれる A,BがC・C'である場合もある
矛盾		同じ場所において相反するイメージAとイメージBが同時に存在しイメージCが導かれる A,BがC・C'である場合もある
複合		イメージAとイメージBが複合されイメージCが導かれる A,BがC・C'である場合もある A,B 2つより更に数の多くなる場合もある
強調		イメージAにイメージBが関与することによってイメージAが強調されイメージCへと深まる A,BがC・C'である場合もある
転換		イメージAにイメージBが関与してイメージAがイメージCに変化する A,BがC・C'である場合もある

A, Bは一般イメージを示し、Cは詩的イメージを示す。

5. まとめ

詩的なイメージ構造の調査・分析から、詩的イメージを形成するイメージ構造型である『イメージの詩化パターン』として8つ（生成、変容、収束、対比、矛盾、複合、強調、転換）の型が得られた。調査の質的限定（被験者を20代に限ったこと）や量的限界もあり、これですべての『イメージの詩化パターン』をつくしたとは言えない。今後の調査によってあらたな詩化パターンの発見があるかもしれない。しかし、『イメージの詩化パターン』の基本的な有り様を把握し、詩的なイメージ構造に関する仮説の妥当性を示すことは一応出来たと考える。今後はさらに調査を続けることでこれを一段と明確化する必要がある。

注

1) コードからずれているものすべてが詩的イメージではない。詩的イメージはコードのずれから生じるとしても逆は必ずしも真ではない。たいした面白みもなかったり、違和感や嫌悪感をもよおすにすぎない場合もあり得る。
2) 具体的現実から個々の具体性を排除し、抽象化し、多数の現実の間の共通性を捉えようとするのが自然科学における客観性の原則だと言える。それでは、個人の心に抱かれるイメージというこの具体的現実を理解するのに自然科学はどのような貢献が出来るだろうか。おそらく何も出来ない。しかし、人々は日常生活の中で、他人を理解し、周囲の様々な具体的現実を理解している。それがなかったら生活というものには成り立たない。そこには何か自然科学以外の理解の方法というものが存在しているはずである。それは解釈であると解釈学は言う。具体的現実に関する理解についての学問が解釈学である。

コミュニケーションの基礎には常に解釈があるのだと言える。とりわけ芸術的手段を通じてのコミュニケーションにおいては強くこのことを主張できる。F. キュンメル(1985)はこう書いている。「音楽の作品はそもそもただその解釈においてのみ『現実的』となる。」⁴⁾。同じことは詩についても当然言えるはずである。「詩的隠喩・・・その解釈の全歴史が、この深みを徐々に解明していく・・・」⁴⁾同じことが神話や夢の世界、また人間の心の深い層に潜むものについても言えるはずであり、これを対象とする学問が深層心理学だと言える。とすると、深層心理学は広い意味での解釈学の一分野だということになる。

したがって、「被験者の心になって」という言い方は、相手をよく知ってその心を解釈するという理解の仕方を、インタビューという場面に即して述べた言い方であると同時に、恣意的な解釈に陥ることを避けるための方策である。本研究においては、そうした方法で調査を行う。次いでそこで得ることの出来た資料の分析を進めることになるが、その各段階を通じて、解釈学的なものの考え方、方法に依存しつつ進める。

3) 前稿「〈詩性〉の研究手法に関する考察 環境の〈詩性〉に関する研究 その2」、日本建築学会計画系論文報告集、第518号、pp156、参照。
4) 図1の各段階で質問などの仕方について簡単に以下に記す。

1. 「あなたの心に残っている場所はどこですか。」「はつとするような体験、ある場所で感動したことがありますか。その場所は何処ですか。」などの質問を行う。幾つかの場所を上げてもらい、インタビュー対象場所を決定する。2. 「どうしてそこに行ったのですか。」「どのような道筋を通りましたか。」「何がありましたか。」「どのようなイメージでしたか。」などの質問を行い、実験者が被験者の言おうとしている場所についての概要を把握する。3. 「どの部分が印象に残っていますか。」などの質問を行う。印象の強い部分が複数ある場合は複数述べてもらう。4. 「どのようなイメージでしたか。」「どのようなものがありましたか。」「そこがどのような状況や印象でしたか。」などの質問を行う。印象が強いと述べられた部分全てについて行う。5. 「他に印象に残っている部分はありますか。」などの質問を行い、ある場合は手順4に戻る。6. 「2つの部分が合わされてこの全体のイメージになっているんですね。そういうことってありますよね。」「このイメージはこの部分とずいぶん関係が深いんですね。」などと調子を合わせながら、部分と部分の関係を探る。7. 明確でない部分がある場合は再度インタビューを行う。8. イメージ構造図の作成。9. 被験者に確認をお願いする。被験者が充分納得できない場合は修正を行う。

5) イメージコードは集団内の感じ方の制度であることを「2-1 イメージコード」の項で述べている。一方、詩的イメージはコードからの逸脱によるものであり、逸脱の形式は集団によらず共通なのか、あるいは集団によって独自の形式をもつものなのかということが問題になる。今回の調査では20代の男女という集団を対象としたので、今後は違う年代の人についても調査を行いその点の確認を行いたい。今回は逸脱形式に関する仮説について一応の検証を行うために限定的な調査を行った。

6) インタビューリストを表2に示す。

表2 インタビューリスト

事例番号	事例場所	性別	調査年齢	体験年齢
インタビュー1	静岡の街路	女	22	21
インタビュー2	大江の川	女	26	20
インタビュー3	実家の納戸	女	22	8
インタビュー4	永平寺	女	22	18
インタビュー5	ナディアパークの地下	女	22	21
インタビュー6	ナディアパーク	女	22	21
インタビュー7	愛知県児童総合センター	男	23	22
インタビュー8	アデレードの教会	男	23	21
インタビュー9	アメリカの山小屋	男	23	17
インタビュー10	豊田市美術館	女	23	19
インタビュー11	インドメインサザール	男	22	20
インタビュー12	APCビル	女	21	19
インタビュー13	新宿の喫茶店	女	21	18
インタビュー14	マルチメディア工房	女	22	19
インタビュー15	新美南吉記念館	女	22	20
インタビュー16	金刀比羅宮	女	27	15
インタビュー17	東京国際フォーラム	男	24	21
インタビュー18	タージマハール	女	26	23
インタビュー19	ミラノのドーモ	女	21	20
インタビュー20	豊田市美術館	男	22	18
インタビュー21	セントポール大聖堂	男	22	21
インタビュー22	伊勢神宮	男	24	18
インタビュー23	関西国際空港	男	22	20
インタビュー24	シュタデルホーベン駅	男	23	21
インタビュー25	アルハンブラ宮殿	女	26	21

7) インタビューの全文を示す。

インタビュー3 実家の納戸

小学校3,4年の時/仏間があって、縁側があって、横長、納戸結構大きい、縦に3,4畳あった。/薄暗い、窓は一個/家を壊した時、お父さんの親友に「今、前の家で一番印象に残ってるのは？」と聞かれて押入の中って答えた。/北側にあるから直接日は入らない/納戸の中にはお米や布団が入っていた。/入る前は何となく怖い感じ、最初は入れなかった場所、怖くて、暗いし、入り口が見えない、狭い感じがして怖かった。/あさるものがあつた。もつと小さい時のものが入ってたりして、昔のことを思い出す。/なにか見たいな、ちっちゃい時の思い出が、見たことのないものがあつたりして。/中に入っちゃうと結構長くいた。/アルバム、外に出してくるのめんどくさかった。/かられた時も入ってた。/一人になりたい、前、部屋ってものがなかったから、そこが一人になれる場所だったかもしれない。逃げ場/廊下は狭い、1mあるかないか。明るい方だった。日は入ってきた。/いつも人が通るわけじゃなくて、一人でしか入ったことないと思う。/変な子だったんだよ、きつと/電気はつけてた。/天井そんなに高くなかった。/荷物は脇にあつたり奥にあつた。/布団の近くがお気に入りだった。/1時間以上はいなかったと思う。毎日入ってなかった、たまに。/一番中で思い浮かぶのは布団。/ひんやりした感じ。/押入は最初、知らない場所だったから怖かった。/なんかこわかった。暗くて何か狭くて。/何となくこわい感じ。おぼけがいそうとかそういう感じ。/小さい子にしてみれば暗いところや、おたことないところはこわいよ。/おぼけいるんじゃないかって。/だけど、なんかのきっかけで入れるようになったんだけどね。/何かは分からない、忘れた。何でだろう。/あさるもんはあつたんだけど、入ろうと思ったきっかけっていうのはやっぱり分かんないなあ。/一番好きな場所って・・・好きなかなあ・・・でも、一番ことが思い出す。/結構長い時間。/懐かしい・・・そんな時そんな時で変わりそうだし、その時押入は逃げ場になっていたかもしれない。/めっちゃくちゃ楽しかった。/でもないんだけど、もし、その時すごいしかられて悲しくなったら・・・何だろう・・・考えたことなかったから・・・暗さで違うし体感じる温度も違うし、あと、においも違ったんだよ。/においもあつたんだよ、物置のにおいってあるじゃん。なんて言ったらいいんだろ、私にとって嫌なにおいじゃない。/布団とかあつたから防虫剤みたいな、分かんないけど、まだ何かがある。/狭さとか広さっていうの、それが私私しかったのかなあ・・・違う違う。/長いトンネルっていうか、あと、においも違ったんだよ。先に何があるんだろう、それなら洞窟、入ったことないけど、そんな感じ。探検みたいな、何があるんだろう。/探検している気持ちがあったかもしれない。次何があるんだろう、わくわくした感じ。/いっぱいものがある所が好きかもしれない。/それを見てたり、でも結局は見てはいないんだけど・・・次に何があるんだろうっていうのが好きで入ってた。/布団はあるべきもの、そういう時はあつてほしいもの、柔らかいでしょう。/きつとしかられて、だれにも頼れなかった時だから、なんか包んでくれそうな感じ。/とりあえず軟らかいものはあつた。/その時、おいで味とかも想像出来たかもしれない、今は出来ない。/音とかは静かだった。中で静かにしなくちゃいけない雰囲気があつた。/周りが静かだと静かにしなくちゃいけないっていうのがあるのかなあ。私に。/見つかったらいけないかと思ったのかな。/悪いこと全然してないんだけど、でも、きつと見つかったても何も言われないんだと思う。/だって怒る人いないでしょう。/ちようどいい狭さだったとか。/仏間から開けると外が見えて、物置の引き戸がある。/開けるとそんなに広さはない。正面に何かが置いてあつた。/一歩入ると奥のほうに布団がある。/何があるんだろうってちよつと楽しんで。/アルバムとか見るのに時間がかかりそうなの、布団の方に持っていった。/布団をいくつかのカバーでしまつてあつて、布団よりかかって。/なんか探しているんだと思う、何回も見てた。/探してなんだろうって見るのが好き。/床は板張り季節は夏、夕方ぐらゐ、明るい感じしても直接光が入ってこない磨りガラス。/人に見られたことはいない。/見つけたら何してるのって言われそう、隠れてコソコソやっている感じだったからかな。/罪の意識は多少あつたのかなあ。見つかったらいけない。/親とか来ない、コソ

コソやっている感じ、そういう風に見られているのが嫌、隠れて何やっているのっていわれるのが嫌だったかも。親はそんなのは興味のないことだったんだよね。妹は入ったことがないと思う。知られたくなかったわけでもない、知られたら知られたで別にいいと思う。でも、妹が自分の前に入っていたら邪魔って思う。私の場所って、部屋なかったら本当に自分の部屋だと思っていた。壊れる時は新しい家が建つことで嬉しかったから、これがなくなって悲しいって思わなかった。/やっぱりここが私の部屋みたいなものだったのかなあ。大きくなってから入ってなかった。/見つけたばかりの時によく行ってた、自分の部屋が欲しかったんだと思う。/その場所だけまだあったら、たまに自分の何かを見に行くだろうけど、今は自分の部屋があるから行かないだろうな。/一言で言うと懐かしい。/楽しかったなと思う。わくわくしたっていうか、その中にいることが、いろんなものを見ることが、寂しくなった時出ていたのかなあ、でも、そんなに寂しいっていうのなかったと思う。/よく行っていたのは三年生ぐらいから。/どんなにおいかなんないけど、でも、においがあったっていうのははっきり覚えてる。/おじさんに言われた時に匂いとか覚えてるよって言ったもん、そんな時においのことを言った気がする。

インタビュー4 永平寺

言葉にすると終わる。言葉は嫌だ。私の中でもう終わるから。/近くに来ても全然お寺がある雰囲気じゃない。/お土産屋とか古くさいイメージ、しょうもないような所、旨味期限を過ぎているような、さびれた。/街自体も殺風景だし、道も狭いから余計圧迫された感じ。夕方だから余計に、こんな所にあるのか。/坂を歩いて行くとき大きな岩に永平寺って書いてあって、歩いている途中では見えない。/えーこれが総本山のお寺って感じ、がっかりって。/道が開けているから明るい、周りが山だから光が当たっているだけで、左にお寺がある。/修行する人がいるから宿舎とかいっぱい建物が並んで、L字型とまっすぐな通路。/そこを歩いていくと急に雰囲気が変わる。普通のお寺の道みたいな感じから急に、/なんか後ろを振り返っても、その道が続いているような新鮮な感じ。/前向いて歩いているからそのイメージが後ろにも続いて今まで来た道が見えない感じ。神秘的な、透明な感じ。/周りは杉が立っているし、年代を感じさせるような。/深い森の中、道が石畳。/その前で修行している人が掃除をされていてすごくきれいでゴミもないし、他の人も捨てようとかそういう人もいないだろうし。/お坊さんの世界って感じではない。/歩いていて風が透明なんだけど、落葉緑とか水色なんかに見える感じ。/なんか分かんないけど、こう、自分が透明じゃないけど、とにかく透明な感じ、自分自身。/深い森の中で石畳と芝生の上だけに日が差し込む。/芝生もきれいだし、岩があって芝生みたいな。/建物の造りからはそういう風に感じない。/あれは全部自然のもので出来てるから、石と木と芝生。/それ以外感じさせない、あまり大規模じゃないから。その通りだけで自然みたいな感じ。道を歩いている限り建物は目に入らない。/真正面にもあるけどその手前のどんと大きな木に目が行くから。/風は黄緑って言うのは実際の色じゃなくて、こう…見えるような。/言い換えると空気が見える風が見える。/分かんないなあ、水を感じる感じ。…水に色付いてるようで付いてないような。/その中では「無」、自分が小さいと思ったりすることもあるけど、そこは「はあ」って感じだけ。何も考えない…考えられないんじゃないけど、ただいるって感じ。/自分がいなくても輪郭は頭の中である感じ。その場に馴染むじゃないんだけど溶け込む。/今までここまでのことはなかった。/でも自分の精神状態にもよると思う。すごい疲れて最初のイメージが悪かったから。/こんな所って全部マイナスのイメージで行ったからかな。/建物の中はきれいだった。床とか磨かれてるし生活しているわけだから他の寺とは違う。/その通りに人がいても感じない。/歩いてるとただの道、きれいだなって雰囲気だけど、止まると上とか見上げると、さっき言ったみたいな気持ちになる。/いってお母さんとかおばあちゃんとかから聞いていたから、いい場所なんだなって自分の中でも気持ちがプラスされたような気がする。/でも、おみやげ屋とかの寂れた場所の悪いイメージもあった。/でも、最初のイメージの方がきつい。いって聞いて、その後、自分で見たので気持ちの場所が違ような感じがして、言われないってイメージの所と自分で実際見たことは記憶される所が違。で、いって行って見たものと、自分で見ていって感じたのは、最初にお母さんの言ったのと同じ所に行く気持ちだから。/実際は見たのははじめ悪いイメージだったけど、私の目で見ただけの、その表面的な感情、気持ち的には若い。/他に色と言うと黄緑、水色でも実際、色はあったわけではなくて…。/新鮮、心にどーんとくる。/木が何本か通りの脇にある山に囲まれていたような。/建物は木と瓦のイメージ。室内は磨かれた黒い、室外は目がいけない。/何歩か入って歩いた時に「無」って言う感じ。/立ち止まると時間とかは関係ない、周りの人も見えないうし、自分も分からない。

インタビュー6 ナディアパーク

まあ、他のデパートに比べると凝ってる感じ。/最初に行った時は2年前。最初に行った時は大して、全然なんにも思わなくて、で、別に本当に、/何にも思わなくて、何回か行ったけど、なんにも思わなかったけど。ある日夕方くらいに入って、で、お店入って、適当にお店入って明るい。/所について、ふっと外に出たら、真ん中がすごい暗くて、真ん中って階段があったり、水があるところで、ガクッと暗くて外の暗さと同じくらい暗くて、あれっ、外とか一瞬思ったけど、それがすごく良かった。/中にいるはずなのに急に外なんだよ。/ちよっと衝撃じゃんそれは。/他の場所は別に何とも思わない。/他のデパートに比べればいいけど、別に建物の中でどこがっていう言われたらその真ん中、こう、上に登ってって感じとか、見下ろした方がいいかも。基本的にあそこ暗いじゃん。/なんかこう、暖色系の明かり、ああゆうのでこぼこぼこって感じて明るくて、でも、基本的に暗いから、それが良かった。/急に暗くなったりするのは好き。/明るいって落ち着い

ちやう感じがして嫌。/なんか、なんか明るい時も一回行ったんだけど、和やかな空気って感じで…。/でも夕方とかだったし、なんかこう夜行性みたいな感じ、怪しい感じ。/なんかねえドーンと上まで抜けてる感じがして、その暗い場所が。/お店から出てきて、暗くて上に抜けるじゃん、あそこ、なんか空みたいっていうか、そんで、この辺下がゴツゴツしてるじゃん石っぽいじゃん、石っぽくて、暗くて、外、外だって思った。本当に外かなって思った、みたいなじゃなくて。/「あれっ」って思った。/温度とかは覚えてないけど石の質感みたいのはこう、見えた。で、こう、上に抜けてるから。/本当に突然ね。お店から出て突然。/で、本当の外が向こう側に見えて、で、こう暗くて外も、この暗さと同じくらい暗さで、あつ外って思ったけど中だった。/自分では2、3秒って感じだったけど実際は1秒ぐらい。/軽い錯覚。/そこから外出した時はなんともない。/店の印象は普通のおしゃれなお店、普通のどこにでもあるお店で、そういう風に意識しないから、出てきた時に「あつ」びっくりって感じ。/他の場所ではない、中で外って思ったのはそこだけ。

8) 注2参照。

9) 状況は例えば、暗い、明るい、広い、狭いなど。

10) 逃げ場のある種の落ち着きと冒険心をそそるわくわくした感じの対比的な一体化。

11)

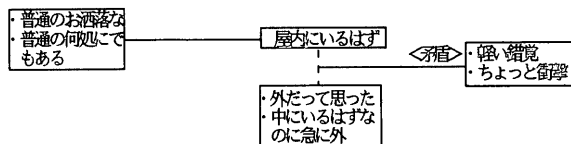


図5 イメージ構造図詳細(インタビュー6)

12) 高木清江・瀬尾文彰・松本直司、「環境の文化特性に関する考察 環境の〈詩性〉に関する研究 その1」、日本建築学会計画系論文報告集、第502号、pp120、参照。

13) 図3は〈生成〉〈変容〉の流れであるが、図を見る限りでは分断された構造を有していないように読みとれるかもしれないが、流れが中断されているという形では分断されている。この流れでは、「今まで来た道が見えない」「透明な感じ」などの異常なイメージの飛躍があり、そこから「心にどんとくる」さらに「はあって感じ」への〈変容〉がなされている。1つ1つの言葉が、言葉になりにくい詩的イメージをどのように表現すればよいのかということを探索しながらでてきた言葉であり、日常的なイメージにおけるスムーズなつながりはない。

表3 インタビューに表れた詩化パターン種別

		詩化パターン種別							
		生成	変容	収束	対比	矛盾	複合	強調	転換
事例番号	インタビュー1	○							
	インタビュー2		○	○	○				
	インタビュー3		○		○				
	インタビュー4	○	○						
	インタビュー5		○				○		
	インタビュー6					○			
	インタビュー7	○					○	○	
	インタビュー8						○	○	
	インタビュー9		○		○		○		
	インタビュー10	○	○			○	○		
	インタビュー11		○				○		
	インタビュー12	○						○	○
	インタビュー13						○		○
	インタビュー14	○			○	○		○	
	インタビュー15	○	○		○	○	○		
	インタビュー16	○			○		○		
	インタビュー17		○			○			
	インタビュー18	○	○		○		○		
	インタビュー19	○					○		
	インタビュー20		○				○		
	インタビュー21	○					○		
	インタビュー22		○		○		○	○	
	インタビュー23		○				○		○
	インタビュー24	○				○			
	インタビュー25		○		○		○		

○印は事例において存在した詩化パターンを示す

15) 前稿のケーススタディにおいて、〈対比〉は意味部のズレ、〈対立〉はイメージ相互の背反関係とした。しかし、この調査においてその考えを改め、〈対立〉という言葉を用いないこととし、前稿においての〈対比〉と〈対立〉を〈対比〉として扱うこととした。

参考文献

- 1) 高木清江・瀬尾文彰・松本直司、「〈詩性〉の研究 方法に関する考察 環境の〈詩性〉に関する研究 その2」、日本建築学会計画系論文報告集、第518号、pp153-160、1999.4
- 2) 河合肇雄：イメージの心理学、青土社 1991
- 3) 瀬尾文彰著：詩としての建築、現代企画室 1986
- 4) F. キュンメル著、松田高志訳：現代解読学入門 理解と前理解・文化人間学、玉川大学出版部 1985

(2000年2月10日原稿受理、2000年6月22日採用決定)